

児童虐待死亡事例の裁判記録から子どものアドボカシーを考える



【中野キャンパス】 人文社会学部 人間文化学科 福祉コース 教授

齋藤 知子 Saito Tomoko

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード：児童虐待・裁判事例研究・人材育成



研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

行政機関による児童虐待死亡事例検証報告を参考に、報告されている事例のうち関係機関がかかわった事例について裁判記録を閲覧し、そこから読み取った被害児の言動から、子どものアドボカシーについての課題を挙げ、子どもの声を適切に聞くために、必要な人材を育成する意義について考察した。

本研究におけるアドボカシーの対象については、①意思表示が難しい、②権利や希望を尊重する必要がある、③自己決定を支えるための支援の必要である。以上の定義を用いていた上で、被害児を対象としている。

今までの研究の中で、裁判傍聴や閲覧した裁判記録資料から、子どもの言動が一時保護や家庭引き取りなどに大きく影響があると思われる場面を持つ2つの裁判事例をあげる。さらに事例研究を実施し課題点やその解決方法を考察することで、今後、同じことを繰り返さないために何を見間違えたのか検証し、これから、どうすべきかを考える上で意義がある。

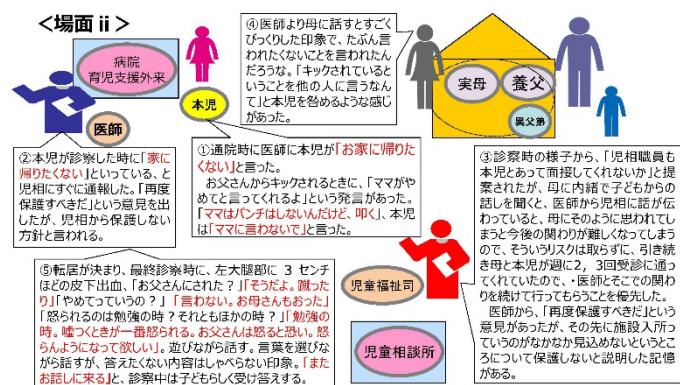


＜場面 i の概要＞

・本児は同年10月より、継母が保育園に迎えに行っても、一緒に帰りがたらず、泣いて保育士にしがみつくことが多くなり、10月1日、2日にあざを、9日背中や額にあざを、18日左目が腫れ上がると共に左耳たぶにも傷を負って登園してきた。

・保育士が継母に尋ねると、「兄と戦いごっこをしていた」と応えるが、兄は「本児がウンチ出るっていゆなかつたからママが怒ったの」と応え、保育士が本児に「どうしたの、パパがしたの?」「お兄ちゃん?」と聞くと、本児はそれぞれ「ううん」と答え、「ママ?」と尋ねられると「うん」と答えた。

・11月2日、継母が保育園に子供らを迎えに行くと、本児は、顔色を変えて一緒に帰るのを嫌がり、これを見た保育士は、本児に対して「がんばって、歩いて帰るんだよ」と言って本児を抱きしめて帰宅させた。



＜場面 ii の概要＞

・通院時に医師に本児が「家で勉強が出来ないと叩かれる。一時保護施設の職員に話を聞いて欲しい。家に帰りたくない。」と言う。

・医師から児相に連絡が入り、児相と医療機関とのカンファレンスでは児相から「保護しない方針」と言われる。

・本児の発言、「通院時、「お家に帰りたい」と言った。「お父さんからキックされるときに、ママがやめてと言ってくれるよ」という発言があった。「ママはパンチはしないんだけど、叩く」本児は「ママに言わないで」と言った。

・本児に「ママに話していいか」を聞き、母に話すとはずぐりつくりした印象で、たぶん言われたくないことを言われたんだろうな、キックされていることを他の人に言うなんてと本児を咎めるような感じがあったので、こちらが聞きだしたことなので、「怒らないで」と伝えた。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

自治体などが子どものアドボカシーについて適切な人材を育成する際に、協働することができ、研修会の実施や講習をおこなうことで、児童虐待の予防や防止に寄与する有意義な研究であると考える。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

本研究は所属している「日本社会福祉学会」「日本子ども虐待防止学会」「日本司法福祉学会」、「欧州犯罪学会」等において、その一部や関連テーマで個人発表や企画分科会、公募シンポジウムで成果を発表している。